

主 題：主の御名を誇ろう

聖書箇所：詩篇20篇

テーマ：あなたはどんな神様を覚えていますか？

早いもので、今年最後のメッセージとなりました。最後に皆さんとみことばから何を見ようかと、先週はいろいろと考えました。この1年を振り返っての感謝についてしようかなとも思いましたし、この1年は特に教会について学んできたので、そのまとめをしようかなとも思いました。でも、この1年を締めくくるにはこれしかないなと思ったので、聖書をお持ちの方は詩篇20篇をお開きください。

いろいろなことをやり過ぎて記憶が薄れている方もいるかもしれませんが、私たちはこれまでこの詩篇を最初から順番に一つずつ見てきました。約1年と少しかけて20篇まで到達しました。このままのペースで計算すると、あと7年ほどで150篇を終われるかと思います。確かに時間がかかりますけれども、一つ一つのみことばのすばらしさを味わいながら一緒に見ていきたいと思えます。

では、まず一度読みたいと思えますので、みことばを見てください。

詩篇20篇 指揮者のために。ダビデの賛歌

「:1 苦難の日に【主】があなたにお答えになりますように。ヤコブの神の名が、あなたを高く上げますように。:2 主が聖所から、あなたに助けを送り、シオンから、あなたをささえられますように。:3 あなたの穀物のささげ物をすべて心に留め、あなたの全焼のいけにえを受け入れてくださいますように。:4 主があなたの願いどおりにして下さいますように。あなたのすべてのはかりごとを遂げさせてくださいますように。:5 私たちは、あなたの勝利を喜び歌いましょう。私たちの神の御名により旗を高く掲げましょう。【主】があなたの願いのすべてを遂げさせてくださいますように。:6 今こそ、私は知る。【主】は、油をそそがれた者を、お救いになる。主は、右の手の救いの力をもって聖なる天から、お答えになる。:7 ある者はいくさ車を誇り、ある者は馬を誇る。しかし、私たちは私たちの神、【主】の御名を誇ろう。:8 彼らは、ひざをつき、そして倒れた。しかし、私たちは、立ち上がり、まっすぐに立った。:9 【主】よ。王をお救いください。私たちが呼ぶときに私たちに答えてください。」

○歴史的背景

さて、これから見ていく詩篇20篇は“王の詩篇”というものに分類され、著者は表題にもあったように、イスラエルの王であったダビデでした。残念ながら、これがどんな歴史的背景のもとで書かれたのかについては詳しくわかってはいません。しかし、言えることは、この詩篇には今まさに戦いに向かおうとしている王様を覚えて、イスラエルの民が祈っている様子を見て取ることができます。1節の最初にもあるように、王であったダビデの身に「苦難の日」が迫っていました。だから民は自分たちの王様であるダビデを覚えて、彼にとって必要な助けを神様が与えてくださるようにと祈りをささげていたのです。

この詩篇20篇は、これまで見てきたものとはかなり違っています。ただし、大切なことを私たちに教えてくれています。この詩篇は大きく三つの場面に分けることができます。まず一つ目の場面として考えられるのは1-5節です。そこには王様のことを覚えて民が祈りをささげている姿を見ることができます。次の6-8節に、その王様が抱えている確信について記されていて、最後の9節にまとめを見て取ることができます。そしてこれからその三つの場面を一つずつ順に見ていくのですが、それを通してきょう皆さんに特に一つのことをよく考えてほしいと思えます。それはイスラエルの民やダビデがどんな神様を覚え、信頼して祈りをささげていたかということです。内容を見ていけばよくわかることですが、詩篇20篇では苦しみや試練、自分自身の弱さを目の当たりにした者たちがほかの何もので

もなく、ただ神様を覚えている姿を見て取ることができます。そして、その神様に誇りを置くことが、その神様に信頼を置くことが彼らの心に大きな喜びや確信をもたらしていました。もしかしたら今、私たちの中にも、日々の生活の中で起こるさまざまな試練によって、重荷や苦しみを覚えている方もいるかもしれません。何度祈っても状況に変化が見られず、悲しみや失意を覚えている方もいるかもしれません。私たちはいろいろな戦いを日々経験します。だとすれば、きょうのみことばによく耳を傾けてください。私たちの神様がどれほど偉大で、力あるすばらしいお方なのかを改めてともに考えていきたいと思えます。このみことばがそれぞれの心の励ましになることを心から祈っています。

○王のための民の祈り 1-5節

さて、まず最初に1節から見てください。イスラエルの民が王様のために祈りをささげている姿をここに見て取ることができます。1-5節には「～になりますように」という表現が6回にわたって繰り返されていました。民はあなたのため、言いかえれば油注がれた者、王であるダビデのために何度も何度も「～になりますように」と祈っていたのです。実際に彼らはどんなことを祈っていたのでしょうか。ここでは六つのことを見て取ることができます。一つ一つ見ていきましょう。

1) 神様が王に守りを与えてくださること 1節

まず一つ目に民が祈ったことは、神様が王であるダビデに対して守りを与えてくださることでした。1節に「苦難の日に【主】があなたにお答えになりますように。ヤコブの神の名が、あなたを高く上げますように。」とありました。ここで大切な言葉が少なくとも二つ使われています。

一つは、この「苦難の日」と訳されている「苦難」という言葉です。この言葉には、もともと「窮屈な」とか「狭い」といった意味があります。要するにこれは戦いの中で、敵に取り囲まれて圧力を受け、追い詰められて、窮屈になっているような状況を表す言葉が使われているのです。戦争の中で敵に囲まれ、逃げ場などなくなってしまったかのような苦難の時に、ヤハウエである【主】が王にこたえてくださるようにと民は祈っていたのです。

また、それに加えて、「ヤコブの神の名」という表現がここで使われていました。この表現は、聖書の中でここにしか出てきません。一体どうしてダビデはここで「ヤコブの神の名」と、ヤコブの名前を持ち出したのでしょうか？そのことを考える上で、創世記のヤコブという人物を思い返してみてください。ヤコブという人物は、彼自身の弱さや愚かさのゆえにさまざまな困難を経験していました。彼は自分の兄エサウから命を狙われることもありました。しかし、神様はそんなヤコブをあわれんで、彼に助けを与えられていたのです。そしてエサウからも助け出された後、ヤコブは神様に感謝して、このように述べていました。創世記35：2-3「:2 それでヤコブは自分の家族と、自分といっしょにいるすべての者と言った。「あなたがたの中にある異国の神々を取り除き、身をきよめ、着物を着替えなさい。:3 そうして私たちは立って、ベテルに上って行こう。私はそこで、私の苦難の日に私に答え、私の歩いた道に、いつも私とともにおられた神に祭壇を築こう。」」と。つまりヤコブの神様というのは、彼とともにいつも歩んで、苦難の日に答えを与えられたお方でした。イスラエルの人々はみなこれが神様の姿だということを知っていたのです。また、「ヤコブの神の名」というのはここにしか使われていませんけれども、「ヤコブの神」という表現は、旧約聖書の中でほかに17回用いられています。そのうち11回が詩篇の中で登場しています。どんなふうに使われているのかを見れば、詩篇46：7には「万軍の【主】はわれらとともにおられる。ヤコブの神はわれらのとりである。セラ」、また、詩篇81：1には「われらの力であられる神に喜び歌え。ヤコブの神に喜び叫べ。」と、「ヤコブの神」という言葉は、人々にとってのとりでであったり、力であったり、助けや守りを与える存在として、聖書の中で描かれていました。彼らにとってとりでであり、力を、助けを与える存在でした。この神様こそが彼らといつもともにおられるお方でした。そのことをよくわかっていた人々は、王が敵に囲まれ、追い詰められるような状況に置かれた時に、そんな状況から助け出すことのできる神様が王にこたえてくださるようにと祈っていたのです。私

私たちは知っています、かつて神様はヤコブのことも決して見捨てることなく、苦難の日から助け出されました。だから今危険へと向かって行こうとしている私たちの王のためにも、同じことをなしてください。危険な状況に置かれることもあるでしょう。でも置かれるのであれば、その中から王を高く上げて守ってくださいますようにと。こうして民は王のために神様の守りを祈っていました。

2) 神様が王に助けを与えてくださること 2節

二つ目に民が祈っていたことは、神様が王に助けを与えてくださることでした。2節を見ると、「主が聖所から、あなたに助けを送り、シオンから、あなたをささえられますように。」とありました。民はここで王のために助けを祈っていました。でも、その助けというものがどこから来るのかということに少し注目してみてください。どこだと書いていますか？まず「聖所」とありました。この聖所というのは、字義どおり聖い場所のことです。神様が臨在されている場所のことを言いました。そしてその後「シオン」ともありました。このシオン、別名エルサレムの町ですけれども、そこにこの神様の聖所が存在していたのです。つまり、この二つの場所は別々の場所を言わんとしたのではなくて、どちらも同じく神様の臨在を表していました。ですから、王様にとっての助けというものは、ほかの何ものから来るのではなく、神様ご自身からやって来るということでした。神様こそが助けを与える源となる存在だったのです。

ここで覚えておきたいのは、そもそも人々は、自分たちの王が助けを必要とする存在であると理解していたということです。彼らは戦争に出て行くダビデのうちに弱さであったり、欠けている部分があることをよくわかっていました。勝利するためには必ず支えてくれる存在が欠かせないことを彼らはよくわかっていたのです。そして、その助けを彼らは王様の持っている武器やよろい、軍事力のうちに見出せると考えていませんでした。王様自身の持っている知恵や力のうちに見出せるとも考えていませんでした。ただ、その助けは神様ご自身からやって来ると信じていたのです。だからこそ、民は王様のために、その助けが神様から与えられることを祈っていました。

3) 神が王の誠実さに心をとめてくださること 3節

三つ目に民が祈っていたことは、神様が王の誠実さに心をとめてくださることでした。3節にこうありました。「あなたの穀物のささげ物をすべて心に留め、あなたの全焼のいけにえを受け入れてくださいますように。」と。ここで覚えておきたい背景は、当時のイスラエルにおいて戦いの前にささげ物や全焼のいけにえをささげるということは非常に重要なことだったということです。王様は神様への従順のあかしとして、また戦争に向かう兵士たちを聖別し、その上に神様の守りがあることを求めるために、彼らはそのようなことを行っていたのです。

例えば、あのサウル王もいけにえをささげていました。彼がイスラエルの王になった後、数万にもわたるペリシテ人たちがイスラエルを攻めにやって来た時のことです。その時の様子がIサムエル13:5-12に記されています。「:5 ペリシテ人もイスラエル人と戦うために集まった。戦車三万、騎兵六千、それに海辺の砂のように多い民であった。彼らは上って来て、ベテ・アベンの東、ミクマスに陣を敷いた。:6 イスラエルの人々は、民がひどく圧迫されて、自分たちが危険なのを見た。そこで、ほら穴や、奥まった所、岩間、地下室、水ための中に隠れた。:7 またあるヘブル人はヨルダン川を渡って、ガドとギルアデの地へ行った。サウルはなおギルガルにとどまり、民はみな、震えながら彼に従っていた。:8 サウルは、サムエルが定めた日によって、七日間待ったが、サムエルはギルガルに来なかった。それで民は彼から離れて散って行こうとした。:9 そこでサウルは、「全焼のいけにえと和解のいけにえを私のところに持って来なさい」と言った。こうして彼は全焼のいけにえをささげた。:10 ちょうど彼が全焼のいけにえをささげ終わったとき、サムエルがやって来た。サウルは彼を迎えに出てあいさつした。:11 サムエルは言った。「あなたは、なんということをしたのか。」サウルは答えた。「民が私から離れ去って行こうとし、また、あなたも定められた日にお見えにならず、ペリシテ人がミクマスに集まったのを見たからです。:12 今にもペリシテ人がギルガルの私のところに下って来ようとし

ているのに、私は、まだ主に嘆願していないと考え、思い切って全焼のいけにえをささげたのです。」と。どんな様子かわかりますよね？大勢のペリシテ人たちがやって来たことを見て、イスラエルの民たちは非常に恐れました。彼らは危険が間近に迫っていることを覚え、いろいろなところに隠れたのです。サウル王様は、この時、預言者サムエルから、ギルガルという場所で7日間とどまり、自分の到着を待っているようにという指示を受けていました。本来であれば、サムエルがやって来てから神様にいけにえをささげる予定になっていたのです。しかし、サウル王様はそのことを待つことができませんでした。彼は敵が間近に迫っているのを見、民がそれに恐れをなして自分から離れていこうとするのを目にした時に、サムエルの到着を待たずに勝手にいけにえをささげたのです。サウル王様は人間的な手段でもって、自分のもとに民をとどめておこうとしました。彼はサムエルを通して伝えられていた主の命令に逆らい、その行いのゆえに愚か者だと非難されることになったのです。彼のささげたいけにえは神様に背いたものでしたから、神様の前に受け入れられることはなかったのです。サウル王様のささげたいけにえは、悪い例としてここに記されています。

しかし、ダビデはサウル王様とは違いました。彼は戦いの前、神様の前にへりくだって最善のものを心からささげていたのです。なぜそのことがわかるのかというと、実は、この詩篇20篇で用いられている「受け入れてくださいますように」という動詞は、非常に興味深い言葉で、これにはもともと「太っている」とか「肥えていると認める」といった意味があります。つまり、この箇所を直訳すれば、「あなたの全焼のいけにえを太っていると認めてくださいますように」となるのです。ささげたものが太っているというのは、言い換えれば、ささげたものが神様の前に肥えた最善の、最高のものだということです。ダビデは戦いの前に神様にいけにえをささげました。そしてそれが妥協したやせ細ったものではなく、最善で豊かに肥えたものであることを民はよくわかっていました。だからこそ祈ったのです。神様に従って、心から王様がささげたそのいけにえに神様が心をとめて、それを受け入れてくださいますようにと。ダビデが神様の前に喜ばれることを忠実に行っているからこそ、そんな王様を神様が拒むのではなく、その誠実さを忘れずに省みてくださるようにと祈っていたのです。

4) 神様が王の計画を成し遂げてくださること 4節

四つ目に民が祈ったことが4節に出てきます。それは、神様が王様の持っているその計画を成し遂げさせてくださることでした。4節に「主があなたの願いどおりにしてくださいますように。あなたのすべてのはかりごとを遂げさせてくださいますように。」とあります。ここで勘違いしたくないのは、この箇所は何も王様が好き勝手に願っていること、計画していることを神様がかなえてくださいますようにと民が祈っていたのではないということです。どうか王様の思いどおりになるように、すべてをさせてあげてくださいと彼らは求めていませんでした。

では、どういうことを求めていたかということ、自分勝手なものではなくて、神様のみこころに沿った王様の願い、王様の計画を神様が遂げさせてくださるようにということでした。これは文脈を考えればよくわかります。3節で、ダビデが心からへりくだって、神様の前にささげ物をささげていたということを考えました。イスラエルの民は、ダビデの心が神様の前にいつも誠実で喜ばれるものであるということをよくわかっていました。ダビデは、神様の前にふさわしい礼拝をささげて、この方に自分のすべてをゆだねていました。彼はその願いもはかりごと、いつも神様のみこころを求めるものでした。だからこそ、民はそんな彼のはかりごとを神様が顧みて成し遂げてくださるようにと願っていたのです。みこころにかなったものだから、それを成し遂げさせてあげてくださいと。

これは今の私たちにも同じことが言えます。みことばは私たちが望みさえすれば、どんなものでも手に入るとは決して教えてはいません。しかし、神様のみこころにかなったのであれば、それを大胆に求めることができると教えていました。Iヨハネ5：14にも「何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるといふこと、これこそ神に対する私たちの確信です。」とあります。神

のみこころにかなう願いをダビデは持っていました。ダビデは主の前をいつも正しく歩み、その心になかったこと、神様の心になかったことを余すところなく実行するような者でした。そのことを民もよくわかっていたのです。だから、そのことをわかっていた民は、そんな王様に神様がこたえて、その計画を成し遂げてくださることを祈っていました。

5) 神様が王に必ず勝利をもたらしてくださること 5 a 節

五つ目に民が祈っていたことは、神様が王に必ず勝利をもたらしてくださるということでした。5 節前半にこうありました。「私たちは、あなたの勝利を喜び歌いましょう。私たちの神の御名により旗を高く掲げましょう。」と。ここで皆さんもすぐに気づかれたと思います。この祈りは、これまでのものとは少し違ったものでした。これまでは～させてくださいますようにという願いでしたが、この箇所では民は願いではなく、王の勝利を確信した祈りをささげていたのです。「あなたの勝利を喜び歌いましょう」と。彼らは力ある助け主の神様がともにいてくださって、必ずみこころに沿った計画をかなえてくださると確信していたからこそ、その勝利を疑うことはありませんでした。戦いにおいて、王様が絶対に勝利をおさめられると信じていたのです。

でもここでも大切なことは、その勝利がだれによるものかということでした。民はここで、あなたの勝利を喜び歌いましょう、私たちの力によって旗を高く掲げましょうとは言っていませんでした。彼らは「神の御名により旗を高く掲げましょう」と述べていたのです。つまり、もう何度も触れていることですけれども、彼らは戦いにおける勝利の源が自分たちから来るのではなく、神様にあるということをよくわかっていました。神様が偉大な力を持った存在であり、ご自分に従う者には忠実に報いてくださるお方であるからこそ、人々はそんな神様を覚え、この方が必ず王様に勝利をもたらしてくださると祈っていたのです。

6) 神様が王の願いのすべてを果たしてくださること 5 b 節

そして最後六つ目に民が祈ったことは、繰り返しになりますけれども、神様が王の願いのすべてを遂げさせてくださいますようにということです。5 節の後半に「【主】があなたの願いのすべてを遂げさせてくださいますように。」と書いてありました。人々は神様のみこころにかなった歩みをする、ダビデの願いに神様が報いてくださることを祈っていたのです。

○王の揺るがぬ確信 6-8 節

さて、ここまで民が王のためにささげる六つの祈りを見ました。彼らは神様が王様に対して必要な守りや助けを与えてくださるように、その誠実さに心をとめてくださるように、願いや計画のすべてをかなえてくださるように、そして戦いを勝利へと導いてくださいますようにと祈っていたのです。イスラエルの民はそうやって戦いに出て行こうとしている王様を祈りによって支えていました。彼らは王様のことを心から愛していました。自分たちの王が弱さを覚えていたり、不十分な存在であることを覚えていました。しかし同時に、ともにおられる神様がどんな状況の中でも、彼に必要な助けを与えることのできるお方であることをよくわかっていたのです。だからこそ、民はその神様の前に一生懸命に、熱心に祈っていました。

1-5 節には民の祈りを見ることができました。しかし、それでこの詩篇は終わりではありません。続きの6 節からは、王であるダビデに視点移って、彼自身が持っていた揺るがぬ確信について見ることができます。6 節はこのように始まっていました。「今こそ、私は知る。【主】は、油をそそがれた者をお救いになる。主は、右の手の救いの力をもって聖なる天から、お答えになる。」と。振り返ってみれば、これまでは～させてくださいますようにという願いが繰り返されていました。でもここは、「今こそ、私は知る」というふうには、大胆な確信を表す表現に変わっているのです。では、ダビデはどんなことを確信し、どんなことを知ったのかというと、簡潔に言えば、主が救いを与えられるということです。主が救いを与えてくださるお方であることを彼は確信していました。

ここでダビデは、主が「**右の手の救いの力をもって**」天からお答えになられると言っていました。この「**右の手の救いの力**」という表現は、神様の全能の力や権威を表す表現です。そして、これはイスラエルの民にとってよく知った表現でした。なぜかという、それは彼らがエジプトの地からモーセによって連れ出されて、紅海を渡った後でこんなふうに歌っていたからです。出エジプト15：1、6にこんなふうに書かれています。「【主】に向かって私は歌おう。主は輝かしくも勝利を収められ、馬と乗り手とを海の中に投げ込まれたゆえに。……【主】よ。あなたの右の手は力に輝く。【主】よ。あなたの右の手は敵を打ち砕く。」と。かつて神の右の手が働かれた時、そこには大きな助けがありました。そこには人には到底理解することのできない偉大な神様の力を人々は見ました。ダビデはそのような神様の力が自分とともにあることを知っていたからこそ、この方のうちにある救いを、この方のうちにある勝利を確信していたのです。ここで覚えておかなければいけないことは、彼は自分の力や策略によって、戦いに勝利がもたらされるとは言っていなかったということです。彼の確信の土台にあったものは、戦争のための綿密な準備でも、兵士や剣の数でも、自分自身の能力でもありませんでした。彼の土台にあったものは、ただ苦難の日に助けをもたらすことのできる力ある神様でした。

そのことをダビデはよくわかっていました。だからこそ、続きの7節でこう言います。「ある者はいくさ車を誇り、ある者は馬を誇る。しかし、私たちは私たちの神、【主】の御名を誇ろう。」と。この当時、多くの国々はいくさ車や馬というものを誇りにしていました。今の私たちからしたら、いくさ車や馬が彼らにとって価値のあるものだとなかなか想像できないことだと思います。でも彼らにとって、こういったいくさ車や馬を持っているということは、軍事力の大きな差となるものでした。これは今で言う戦車や戦闘機を持っているようなものです。想像してみてください。歩兵だけの軍隊と戦車を有する軍隊とが戦ったら容易に戦車を有している軍が勝利することは目に見えるのです。いくさ車や馬を所有しているということは、この当時、そのまま非常に大きな優位性をもたらすことにつながるものでした。そして知っていましたか？古代イスラエルは、そのいくさ車や馬をほとんど持っていませんでした。イスラエルの一般的な戦士は、その多くが実は歩兵だったのです。だから、イスラエルの歴史を見る時に、彼らは平地ではなく、山や丘で戦っていました。イスラエルはそのような物を持っていませんでした。だからこそ考えてみてください。彼らにとって戦場でいくさ車や馬を目にするということは、どれほど恐ろしいものであったかということです。自分たちが歩兵で行くのに、前から戦車や飛行機がやって来るのを目にした時に、恐れを抱いてしまうのです。

しかし、ここで言われていたことは、そんな中であつたとしても、彼らは人間的な力に、より頼むのではなく、神様の力に信頼することが求められていたということです。かつて申命記の中でもこのように言われていました。申命記20：1に「**あなたが敵と戦うために出て行くとき、馬や戦車や、あなたよりも多い軍勢を見ても、彼らを恐れてはならない。あなたをエジプトの地から導き上られたあなたの神、【主】が、あなたとともにおられる。**」と。神様はイスラエルの民たちが敵の大きさに恐れをなすのではなく、ともにいてくださる神様の大きさに目を向けること、それを覚えることを求めていました。私たちが考えれば、人の目には到底不可能なことのよう思えるものでした。馬や馬車が迫ってくれば、不安や恐れを覚えることは自然な応答でした。しかし、エジプトの地から救い出された、そんな偉大な神様がともにいてくださることを覚えるようにと彼らは求められていたのです。そして、この方のうちにこそ勝利がありました。

だからこそ、20篇に戻って8節を見ると、こんなふうに記されています。「**彼らは、ひざをつき、そして倒れた。しかし、私たちは、立ち上がり、まっすぐに立った。**」と。初めにも言ったように、この詩篇は戦いへと出発して行く王のため、民が祈りをささげている様子が記されているものでした。ですから、まだ戦いは始まっていませんでした。だとしたら、ではどうしてこの箇所は「**彼らは、ひざをつき、そして倒れた**」と、過去形で記されているのだろうかと思いませんか？それは起こる結果という

ものが、もうあまりにも明白なものであるからこそ、敵に勝利したということがもうすでに起こったことのように記されているということです。まだ戦いが始まっていませんでした。でも、全能の神様がともにいてくだされば、負けることなど絶対はない。必ず敵は倒されるという強い確信をここで表現していたのです。神様以外のもの、いくさ車や馬を誇りとする者は滅ぼされ、神様のうちに身をゆだねた者は立ち上がり、真っ直ぐに立つことができるのだと。まさにそのことをイザヤ31：1-3が「:1 ああ。助けを求めてエジプトに下る者たち。彼らは馬にたより、多数の戦車と、非常に強い騎兵隊とに拠り頼み、イスラエルの聖なる方に目を向けず、【主】を求めない。:2 しかし主は、知恵ある方、わざわざをもたらし、みことばを取り消さない。主は、悪を行う者の家と、不法を行う者を助ける者とを攻めたてられる。:3 エジプト人は人間であって神ではなく、彼らの馬も、肉であって霊ではない。【主】が御手を伸ばすと、助ける者はつまずき、助けられる者は倒れて、みな共に滅び果てる。」と記していました。イスラエルの歴史を見た時、私たちが見て取ることができるものは、どんな人間の力も、この世で優れているとされている軍隊も、全能の神様の前にはちりに等しいものなのです。この神様に勝利することのできるような者は存在しません。この方こそが、どんな困難や試練からも人々を助けることができるお方でした。そのように人々を誠実に助け続けておられたのです。この方こそがどんなものよりも誇りとするべきものでした。だから、ある人たちはいくさ車を誇り、ある人たちは馬を誇っています。でも、私たちは神様を知っているから、神様が全能なお方であり、神様がどんな時にも勝利をもたらしてくださるお方だと知っているから、私たちは私たちの神、主の御名を誇ろうと。

一つの例を皆さんと一緒に考えたいと思います。あのネブカデネザル王様とシャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの間にあったことを思い返してみてください。多くの方がよくご存じのように、当時の世界において強大な力を持っていたネブカデネザル王様は、金の像を作って、その像を人々がひれ伏して拝むようにと命じました。そして拝まない者に関しては、だれでも火の燃える炉に投げ込むと脅していました。そのことを聞いたすべての人たちはそれに従いました。この王様の力を目の前にした時に、人々には従わないという選択肢はなかったのです。しかし、シャデラクたち3人はそれを無視して金の像を拝むことはありませんでした。そして、そんな彼らは王様の前に連れて来られるのです。その時の様子がダニエル3：14以降に記されています。3：14-15にまずネブカデネザルがこう言っていました。「:14 ネブカデネザルは彼らに言った。「シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴ。あなたがたは私の神々に仕えず、また私が立てた金の像を拝みもしないというが、ほんとうか。:15 もしあなたがたが、角笛、二管の笛、立琴、三角琴、ハープ、風笛、および、もろもろの楽器の音を聞くときに、ひれ伏して、私が造った像を拝むなら、それでよし。しかし、もし拝まないなら、あなたがたはただちに火の燃える炉の中に投げ込まれる。どの神が、私の手からあなたがたを救い出せよう。」」と。3人は王様の言葉を聞いた後、16-18節で「:16 ……私たちはこのことについて、あなたにお答えする必要はありません。:17 もし、そうならば、私たちの仕える神は、火の燃える炉から私たちを救い出すことができます。王よ。神は私たちをあなたの手から救い出します。:18 しかし、もしそうでなくても、王よ、ご承知ください。私たちはあなたの神々に仕えず、あなたが立てた金の像を拝むこともしません。」と答えました。彼らの前にいた王はその時、地上で最も力ある存在でした。逆らえば、彼らは自分の命が危ないということをよくわかっていました。しかし、彼らはそんな中であっても、恐れて金の像を拝むことはせず、火の炉の中に投げ込まれていくのです。結果はよくご存じのとおり、神様が3人を守り、王の手から彼らを救い出されました。神様は、人の目にはもう絶体絶命だと思えるような状況の中からも、救い出すことのできるお方でした。神様には不可能なことは一つとしてありませんでした。これがシャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの神様であり、ダビデの神様であり、そしてまた私たちにとっても変わらない神様になるのです。

だとすれば、果たして私たちは苦難に直面した時に、何に拠り頼もうとするのでしょうか？特に、自分の手に負えない、そんな苦しみの中に置かれた時に、自分の頭では到底理解できないような問題が降り

かかってきた時に、その中でどのように振る舞うのでしょうか？考えてみてください。私たちはどんなものを誇りとしているのでしょうか？いろいろな問題が私たちの周りでは生じます。私たちはいろいろなものによって心を騒がせることもあります。大きな問題が起これば、神様がどんなお方かということをお忘れてしまったりすることがあります。例えば、神を愛する人々、すなわち神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益ととしてくださることを私たちは知っています。このローマのみことばを大切なものとされているかと思えます。でも、実際はどうでしょう？神様がすべてのことを益ととしてくださると知っていながらも、自分の望ましくない状況になれば、そのことに対して不満や失望を覚え、神様に信頼しないということはないでしょうか？もし、私たちが神様がどれほど偉大な存在かということよりも、自分の抱えている問題を大きくしてしまえば、そこにすぐに不安や恐れというものが襲ってきます。神様がこれまでにどのようなことをなされてきたお方なのかということをお覚えることよりも、今何も起こっていない状況に心を奪われてしまえば、すぐに不満や憤りというものが襲ってきます。私たちが神様がどのような存在なのか、神様が何をなされる存在なのかをお忘れ、神様以外のものに目を向けてしまえば、その信仰は確実に揺らいでしまうのです。果たして私たちは、どこに信頼を置いているのでしょうか？どんな神様を日々覚えて歩んでいるのでしょうか？「ある者はいくさ車を誇り、ある者は馬を誇る。しかし、私たちは私たちの神、【主】の御名を誇ろう。」と。これがきょうあなた自身が持っている確信でしょうか？

○まとめ 9節

そして最後、ダビデはこの詩篇のまとめとして、9節で「【主】よ。王をお救いください。私たちが呼ぶときに私たちに答えてください。」と締めくくっていました。この詩篇は王に対して主の助けが与えられますようにという祈りで始まり、主よ、王をお救いくださいという祈りで終わっていました。この詩篇を通して言えることは、人々は最初から最後まで救いを与えることのできる神様の力に拠り頼んでいたということです。彼らは自分たちの知恵や能力に頼ることをしませんでした。ただ、全能なお方、すばらしいみわざを成し遂げ続けられた、そんなお方に身をゆだねて祈っていました。彼らは自分たちには何もできないということ、そして一方、神様には不可能などいっさいないということをよくわかっていました。問われていることは同じです。果たして私たちはどれほど神様に信頼して日々を歩んでいるのでしょうか？何を誇りとして歩んでいるのでしょうか？私たちの神様はどんな困難な状況にあらうと、その者を救い出すことも、助け出すこともできる力を持ったお方です。この方はダビデやイスラエルの民にとってとりでであり、力であり、助け主でした。彼らはそのことを学び続けて来たのです。この方の前にはどんな敵をも滅ぼされました。

そんな偉大な神様が彼らとともにだけでなく、きょうも私たちとともにいてくださるのです。いや、もっと言えば、ほかのどんな問題よりも私たちにどうすることもできなかった罪の問題から助け出すために。それから私たちを助け出すためにイエス・キリストが恵みによって、私たちに与えられました。油注がれた者が、ダビデの子孫から約束された救世主としてこの地上に來られ、この方であって私たちに今救いが与えられ、変わらぬ希望を持つことができる者へと変えられたのです。そんな救い主がいつもともにいてくださる。だとすれば、私たちはほかの何に信頼を置くのでしょうか？この方以外のほかの何を誇りにするのでしょうか？パウロはローマ8：31で言っていました。「では、これらのことからどう言えるでしょう。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。」と。全知全能で偉大な神様が味方であるのであれば、答えはだれも敵対できる者はいないということです。どんな試練や悩みに置かれることがあったとしても、それに勝る力を持ったすばらしい神様がおられ、その方がともに歩いてくださる。私たちの目にどれだけ大きな問題に見えるものだったとしても、私たちとともにいてくださるその神様にとって大き過ぎる問題は一つとしてありません。そして私たちは、この方に信頼してすべてをゆだねて歩むことができるのです。ですから、私たち自身は学び続けなければいけま

せん。私たちには何もできないということ、そして神様には不可能などいっさいないということです。この方のうちにこそ揺るがぬ確信があります。ですから、主を見上げて、この方を誇りとする者として今週も一日一日を、また来たる新しい年もこの主を覚えて歩み続けていきましょう。